

原邊法安寺 車轅忽打折畢、地下男共、様々加修理被歸之間、於深草又一方之轅打折、左右折之間乘車不叶、面々輿を尋て被歸云々、牛飼失面目逃隱云々、頗不吉不思議事歟、

〔七十一番歌合〕上五番 右 車作

心して車つくらむ秋のよのながえの月のをそくめぐらば

〔枕草子〕ある人の、いみじう時にあひたる人の聲になりて、一月もはかくしうもこでやみに

しかば、すべていみじういひさわぎめのとなどやうのものは、まがくしき事どもいふもある

に、其かへる年の正月に、藏人になりぬ、中六月に、人の入講し給ひし所に、人々あつまりて聞く

に、此藏人になれる聲の略、中忘れにし人の車のとみのを、にはんひのを、引かけつばかりにて居

たりしを、略下

〔古今著聞集〕十二同朝臣源若ざかりに、ある法師の妻を密會しけり、件の女の家の二條猪隈へん

なり、中法師のたがひたる隙をうかひて、夜ふけて、かの堀のはたへ車を寄せければ、女棧敷

の玄とみをあげて、すだれを持あげ、る、其時とびの尾より越入にけり、堀の廣さもまうなりけ

るに、上様に飛入けん、早業の程、凡夫の所爲にあらず、

〔古今著聞集〕二十魚虫禽獸同安承二年、祇園會を菅博士行衡、三條堀川にて見けるに、車のうしろのか

たを引てすぎける牛、とみのをのかたより、車の玄たに入て、車にかけたる牛の左の腹をつきて

けり、

〔成通卿口傳日記〕一坊門殿のか、りの下に、簾もかけぬ車のありしを、引入よと沙汰もせずして、

かたが、りにいみじきなど、さだせしほどに、車の本にて、たびく數鞠をす、われはおとすべか

らすとて、立替て待に、とみのをの方へまりおつ、まわりあはむとせば、おちぬべくて、轅の方より

く、りこえさまに、鞠を庭へ出す、猶轅のうちや落ちんと覺しかば、とみのをの方より走りく